

子どもの親化としてのヤングケアラーに関する尺度開発 および家族スタイルとの関連性に関する研究

— 東京保健医療専門職大学の作業療法学科・理学療法学科1年生における検討 —

小野寺 哲 夫 柳 澤 孝 主

東京保健医療専門職大学リハビリテーション学部作業療法学科

A Study on Scale Development and its Relationship with Family Styles on Young Carers as Parentification in Children.

— Research on Students of Occupational Therapy and Physical Therapy at the Tokyo Professional University of Health Sciences —

Onodera Tetsuo Yanagisawa Takasyu

Department of Occupational Therapy, Faculty of Rehabilitation, Tokyo Professional University of Health Sciences

Abstract : This study is a family psychological research conducted on first-year medical college students regarding young carers who may take on the care responsibilities of adults and provide housework, family care, nursing care, and emotional support.

The subjects were 112 first-year students (mean age = 18.3) majoring in the Department of Occupational Therapy and Physical Therapy at Tokyo Professional University of Health Sciences. The questionnaire consisted of a face sheet and Family Style Scale, Relational Ethics Scale (RES), Child Parentification Scale, and Young Carer survey items.

The results of the statistical analysis showed that 15.3% of all participants answered that there was someone in their family to care for them, but only 3% were identified as true young carers. In addition, a factor analysis of the Child Parentification Scale was conducted, and the correlation analysis was performed to examine the relationship between the four types of family styles and the degree of Young Carer. As a result, there was a significant positive correlation between the autocratic and anarchic family styles and the degree of Young Carer.

Key Words : Young Carer, Parentification, Contextual Therapy, Relational Ethics, Family System=SALAD Model

抄録 : 本研究は、現代日本における家族の世帯構造の変化やひとり親家庭の増加による家族における介護力低下などに伴い、本来大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っているヤングケアラー（Young Carer：以下 YC）について、医療系大学1年生を対象に行われた家族心理学的研究である。

調査対象は、東京保健医療専門職大学の作業療法・理学療法学科1年生112名（平均年齢 =18.3）、質問紙の構成は、フェイスシートと家族スタイル尺度、対人倫理感尺度、子どもの親化尺度、YC 実態調査項目であった。分析の結果、家族内にケアする人が「いる」と回答したのは全体の15.3%であったが、YC と認められたのは3%であった。加えて、子どもの親化尺度の因子分析、および4種類の家族スタイルと YC との関連性についても検討した結果、独裁的および放任的家族スタイルと YC には有意な正の相関が認められた。

キーワード : ヤングケアラー、親化、文脈療法、対人倫理感、家族システム =SALAD モデル

1. はじめに

(1) YC の定義と研究動向について

近年、家族の介護を担っている子どもや若者、すなわちヤングケアラー (Young Carer、以下 YC と略す) の存在が問題視されてきた¹³⁾。その背景には、世帯構造の変化やひとり親家族の増加による家族介護力の低下、家族介護が必要になったとき、ケア役割を子どもが担うことで、かろうじて家族機能を維持しているという状況があると考えられる⁶⁾。

しかし、YC の問題は、E. H. エリクソン (Erik H. Erikson) の発達段階論に照らしても、子どもは発達途上の存在であり、子どもの健全な成長・発達、教育への負の影響だけでなく、本来守られるべき子どもの権利の侵害という視点からも危惧される。

YC の定義については、国や立場の違いによって異なるが、2010年に結成された一般社団法人日本ケアラー連盟によると、「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子どものこと」とされている¹³⁾。また、YC 研究の端緒となったイギリスのソール・ベッカー (Saul Becker) の著書の中では、「慢性的な病気や障害、精神的な問題などを抱える家族のケアをしている18歳未満の子どもや若者」とされている¹³⁾。したがって、YC を「18歳未満の子ども」としている立場が多い。

しかし一方で、YC におけるケア役割は、18歳の誕生日を過ぎたらそこで終わるわけではなく、20代、30代、40代…と、ケアラー役割はケア対象が生存している限り永続していくものであるがゆえに、本来は YC からオールド・ケアラー (OC) まで存在しているはずである。そのような事情を勘案し、オーストラリアでは YC を25歳未満と定義している。

一方、日本では、ヤングケアラーは、少子高齢化や核家族化の進展、共働き世帯の増加、家庭の経済状況の変化といった背景から生じ、ヤングケアラーは、年齢や成長の度合いに見合わない重い責任や負担を負うことで、本人の育ちや教育に (悪) 影響があるといった課題があるがゆえに、彼らの心身の健やかな育ちのためには、関係機関・団体等がしっかりと連携し、ヤングケアラーの早期発見・支援につ

なげる取組が求められているとした。そこで、日本では、関係機関の連携をより一層推進し、ヤングケアラーの支援につなげるための方策について、厚生労働省及び文部科学省が連携し、支援プロジェクトチームを立ち上げ、検討を重ねた結果、令和3年に「ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチーム報告」をとりまとめている。同報告の中で、厚生労働省・文部科学省として取り組むべき施策について、①早期発見・把握、②支援の推進、③社会的認知度の向上の3点を挙げた。

学術分野における YC 研究も増えてきており、その動向に関しては青山²⁾や河本⁸⁾に詳しい。青山は2021年までに様々な主体によって実施されてきた YC 実態調査の知見を手際よく整理し報告している。

また、論文の最後では、YC は「相談する人がいない」など孤立傾向が認められることから、地域のソーシャルキャピタル (社会的信頼、互酬性の規範、社会的ネットワーク) を活用した支援というものを提案している。河本は、YC 先行研究をデータベース検索を基に文献を抽出し、精読し、内容を検討し、最終的に要約表にまとめている。具体的には、2005年から2019年までの期間における YC に関する代表的な論文14本について、背景、目的、方法、結果、考察、強み・弱み、引用、そして限界までを整理している。河本は、2000年から2019年までの期間を5つに分類し、各々の時期における YC 研究の特徴や内容について検討しており、とても参考になる。

膨大な文献レビューの最後で河本は、YC の研究はまだはじまったばかりであり、未着手の部分が多いと指摘した上で、支援においては、YC 本人だけではなく、その家族を支援する必要があるとし、「家族全体を考えるアプローチ」の重要性を指摘した。次節では、家族療法、家族心理学の観点からの50年以上に渡る YC 研究について言及する。

(2) 家族療法・家族心理学における YC 研究について

① YC を意味する家族心理学的概念について

前節まで YC という概念に関するイギリスの研究が初めて紹介された2000年から徐々に社会的に認知され始め、教育、医療、福祉等の分野における専

表1 ヤングケアラーを意味するか関連のある臨床／家族心理学分野の専門用語リスト^{※1}

YC を意味する用語	提唱者	説明
1 親化 (parentification), 親化された子ども (parentified child)	(Boszormenyi-Nagy & Spark, 1973; Boszormenyi-Nagy & Krasner, 1986; Jurkovic, 1997)	一般的に、家族における親化は機能的および/または感情的役割逆転 (emotional role reversal) を伴うと考えられており、親の後方支援的 (logistical) または感情的ニーズに対応しケアするために、子どもは注意、慰め、指導のために、自分自身のニーズを犠牲にする。子どもは親を必要としているので、親が必要としていることにすぐに反応するようになる。
2 親的子ども (parental child)	(Minuchin, 1974; Minuchin & Fishman, 1981)	家族の均衡を保つため、1人または複数の子どもが執行能力を発揮している。
3 家族治療者 (Family Healer)	(Ackerman, 1966)	家庭内のピースメーカー (平和をもたらそうとする人)、仲裁者、または保護者として行動する子どもの別の用語である。
4 家族負担の担い手 (Family Burden Bearer)	(Brody & Spark, 1966)	これは、家族の中で病気がちな親の責任を引き受け、兄弟姉妹を保護する役割を担い、家族全体の役割を担っている可能性が高い。
5 過剰機能 (Over-functioning)	(Bowen, 1978; (Kerr & Bowen, 1988))	ボーエンとその共同研究者は、関係システムにおける相補的な機能的位置について説明した。関係システムでは、一方のメンバーが過剰機能すると他方は過小機能する。この構造は親と子の間にも存在し、機能的分化 (functional differentiation) の中心部分であるそれぞれのメンバーの「偽の自己 (pseudo-self)」の交換によって支えられている。
6 家族の英雄 (Family Hero)	(Wegscheider - Cruse, 1985, 1990)	ウェークシャイダー・クルーズ (1985, 1990) はアルコール依存症家族における子供の様々な役割を分類している。例えば、家族の英雄は長子であることが多く、親としての責任を背負い、学校では成績優秀で、擬似的に成熟し、支配的で、承認を求め、強迫的な傾向がみられる。

※1 Jurkovic, G. J. (1997)⁶⁾ においては、YC に関連した30種類の概念が記述されているが、中でも家族心理学文献で頻出する6用語を厳選して示した。

門職や研究者によって問題化されるまでについて概観してきた⁸⁾が、家族療法・家族心理学の領域においては、50年以上前から研究されていたということ、を、まず初めに指摘しておかなければならない。ただ、当時は Young Carer という用語ではなく、表1に示すように、家族療法・臨床／家族心理学分野においては様々な用語で表現されてきた⁷⁾。

表1より、YC を含意するか関連のある用語が多数存在してきたことがわかる。中でも、親化 (parentification)、親化された子ども (parentified child)、親的子ども (parental child) という概念については、1970年代頃からボスゾルメニイ＝ナージ (Boszormenyi-Nagy) や ミニューチン (Salvador Minuchin: 家族療法の構造派の創始者) などの家族療法家たちによって、頻繁に言及され、臨床的に研究されてきた⁴⁾⁷⁾。

(3) ボスゾルメニイ＝ナージの文脈療法について

本研究の最も理論的ベースになっているのは、ボスゾルメニイ＝ナージの文脈療法 (Contextual Therapy) アプローチである。文脈療法は、代表的家

族療法理論³⁾⁷⁾のうちの一つで、その特徴は、①家族を一つのシステム (System) として捉えるシステム理論であり、②ボーエン家族システムズ理論と同様、多世代家族理論であり、これが最も重要なのであるが、③家族や夫婦におけるギブ・アンド・テイクの相互作用におけるバランス＝公平性 (Fairness) を重視し、相手に与える量 (ギブ) と相手から受け取る量 (テイク) のバランスがほぼ均衡しているならば、倫理的に公正であるとする対人倫理感 (relational ethics) という概念を導入しているところである。

心理療法／家族療法において対人関係における倫理的側面を理論に正式に組み込んでいるのは、ナージの文脈療法だけである。ただ2つの理由で、文脈療法は家族療法／家族心理学者から敬遠されてきた。

1つは、文脈療法は非常に難解であることである。文脈療法は、通常の家系療法理論とは異なり、理論的射程が超領域的であまりに広く、理論的説明において使用されている専門用語が難解なので、多くの専門家が忌避してしまうのである。

2つは、家族システム理論であるにもかかわらず、過去志向であることである。家族療法は、過去の母子関係に症状の原因を還元する精神分析パラダイムからの決別を契機に誕生したアプローチであるから、標準的な家族療法では「過去」は扱わないのであるが、文脈療法では、現在の症状に対する過去数世代の影響を重視するのである³⁾。

(4) 親化について

親化 (parentification) 概念の誕生前の1967年、ミニニューチンによって親的子ども (parental child) という用語が導入され、親の責任を引き受ける子どもという概念が経済的階層や家族サイズという大きな文脈に位置づけられるようになった⁴⁾。

ミニニューチンによると、低所得層の家庭では、一家の主たる賃金労働者である親が不在の場合、年長の子どもが親の責任を引き受けることは珍しくなく、多くの実際的な目的にも役立ってきた。親的子どもに関するこの記述は、経済的および社会的条件に照らして、このような役割逆転の適応的機能を指摘することによって、この親的子どもという現象をある程度脱病理化した (de-pathologized) と言うことができる。

ミニニューチンは、親の責任が複数の兄弟姉妹によって共有されている場合、責任が子どもの能力を超えておらず、子どもが自分の与えたものに対して認められサポートを受けているならば、親的子ども役割は必ずしも問題ではないことを明らかにした。

しかし、親的子どもがこれらの責任を果たす上で大人からの十分なサポートを受けられず、家族内の大人と子ども間の世代間境界や権力構造が曖昧になりすぎた場合、このような役割逆転パターンは問題となるだろうと指摘した。

このような流れを受けて、1973年、ボスゾルメニイ＝ナージとスパーク (Boszormenyi-Nagy & Spark) は、「至る所で見られる、ほとんどの人間関係の重要な側面」を説明するために親化 (parentification) という用語を初めて使用し、この概念を、すべての重要な関係性に特徴的な互惠性 (reciprocity)、正義 (justice)、公平性 (fairness)、忠誠心 (loyalty) の力学を強調する「弁証法的関係理論 (dialectical relational theory)」の文脈に位置づけ

た⁴⁾。そして、ボスゾルメニイ＝ナージの親化の概念においては、関係性力学における「不可視の (invisible)」側面、すなわち彼らの言葉で言えば、「顕在的な役割付与と内面化された期待とコミットメントの特徴を持つ関係性のパターン」という新たな側面について記述したのである。親化の概念が組み込まれているボスゾルメニイ＝ナージらの弁証法的理論においては、個人的経験と関係的経験は不可分であり、個人的自己の発達には「他者」との関係性に依存すると弁証法的に仮定されている⁴⁾。

先述したように、ボスゾルメニイ＝ナージは、親化を、あらゆる関係性における構成要素であると広く定義した上で、親化は本質的に病的な現象ではないと主張した。実際、子どもの親化は、善意の意味では、おそらくすべての親に対する子どもの態度の一部であり、この肯定的な意味においては、親が感情的に疲弊するのを防ぐための試みでもあると思われる。

一方、不健全な親化は、互惠性、対称性、つまりギブ・アンド・テイクのバランスが親子間の交換において損なわれて、子どもの発達に悪影響を及ぼす場合に起こるとされる。このような病的親化 (pathological parentification) は、子どもの幼児化として現れることもあれば、親が子どもに対して、感情的 (表出的) ケアまたは道具的ケアといった形で未熟な過剰機能 (Over-functioning) を要求する役割として現れることもある。

ボスゾルメニイ＝ナージにおける親化の概念のもう一つの側面は、このような現象を3世代の文脈で見る必要性である³⁾。より簡単に言えば、親は、これらの「負債 (debts)」を解決するために子ども (または他の重要な関係) に頼ることによって、母親と父親との間の満たされていない関係の「台帳のバランス (balance the ledger)」を取ろうとすることがあるかもしれない。

喪失 (loss) と補償 (compensation) というテーマは、世代内および世代間の親化の行動を追跡するための道筋を提供するのである。ここでも、ボスゾルメニイ＝ナージの理論的焦点は、親の必要性 (多くは両親との関係によって満たされていない) のために搾取される対象として、親化された子どもの逆説的な状況を強調し、同時に、子どもは様々な役割に

において表されるような義務のために喜んで協力し、自発的に協力するということを強調したのである⁷⁾。

(5) 親化尺度について

以上、親化について概説してきたわけであるが、本研究では、親化概念を初めて使用し、この概念を理論的にも深めたボスゾルメニ＝ナージの文脈療法理論に基づいて、子どもの親化尺度の開発を試みる。

現在、日本においては、ナージの理論に基づいた子どもの親化測定尺度は存在しない。また、海外においても数が少ない。具体的には、親化質問票 (Parentification Questionnaire) (Jurkovic, G. J., 1997) と親化尺度 (Parentification Scale) (Mika, Bergner, & Baum, 1987) の2つがあるが、特に前者の親化質問票はユルコビッチによって開発された42項目の「当てはまる」「当てはまらない」という2件法からなる尺度で高く評価されている。後者の親化尺度は大学生を対象とした調査に基づいて開発された尺度であり、加えて倫理的側面に関する項目が含まれていないなどが指摘されている⁷⁾。いずれにしても、「ヤングケアラー尺度」といった流行りの名称ではなく、50年以上の歴史があるナージの文脈療法理論に基づいた日本語による子どもの親化を測定できる尺度開発が待たれていることは間違いない。

(6) 家族システム =SALAD モデルについて

小野寺¹²⁾によって考案された家族システム =SALAD モデル (以下、家族 SALAD モデルと表記) は、レヴィン (Kurt Lewin) らの研究グループによって行われた「アイオワ実験」という記念碑的研究を基礎としつつ、家族システムにおける、いわゆるシステム論的側面と政治的 (political) 側面を新しい角度から把握できる家族モデルである¹²⁾。

レヴィンらの研究では、民主制、独裁制、自由放任という3種類の社会風土におけるリーダーの行動と成員の反応を実験的に検討していた。レヴィンらの研究を要約すると、仕事量 (作業効率) は、独裁制が短期的には最も高かったが、長期的には民主制と大差はなかった。したがって、レヴィンは、作業の質、作業意欲、友好的な行動などを総合的に判断

した結果、民主制が最も効果的な体制であると結論したのである。

このような先行研究からインスピレーションを受けながらも、アダム・スミス (Adam Smith) やエドマンド・バーク (Edmund Burke)、特にフリードリッヒ・フォン・ハイエク (Friedrich August von Hayek) の哲学思想の知見が加わって誕生したのが、家族 SALAD モデルである。

ハイエクにとって、家族は自生的秩序 (Spontaneous Order) である。自生的秩序とは、「人間活動の結果ではあっても、人間の意図的設計の結果ではない」秩序を指す。つまり家族システムも、誰かによって人工的に設計されて出来たものでもなければ、ポストモダン論者のように、言語的に構築されたものでもなく、はたまた全くの自然状態から突然生まれ出てきたものでもなく、ある特定の社会の中における人間活動の長い歴史を通して意図せざる結果として徐々に成長・発展してきた制度である。

家族 SALAD モデルでは、先述のレヴィンらの民主制、独裁制、自由放任に、この「自生的秩序」を加えた4つの家族スタイルとして考案された。そして、4つの体制それぞれの頭文字を取って SALAD (サラダ) と名づけられた。(図1)

独裁的家族 A (autocracy)	自生的秩序的家族 S (Spontaneous order)
民主的家族 D (Democracy)	自由放任的家族 L A (Laissez-faire)

図1 家族システム =SALAD モデル (小野寺, 2015)

以下に4種類の家族システムについて説明する。家族 SALAD モデルの1つ目は、自生的秩序的 (Spontaneous Order) 家族である。これは4つの中で唯一、過去 (歴史や伝統、先祖など) や道徳/慣習とつながっている家族システムである。先述のように、家族は人間の設計によって人工的に作られたも

のではなく、長い歴史の中で、自生的に発展してきた秩序であり、したがって柳田民俗学がその本質を見事に記述したように、先祖に感謝し、先祖から継承した慣習を守り、家の永続、子孫繁栄を目指すのがこの家族システムである。

家族 SALAD モデルの 2 つ目は、独裁的 (Autocracy) 家族で、父親か母親どちらか一方が権力 = 主導権を握っていて、家族内で起こることの解釈 ≠ 意味づけから何をどうするか、までを完全に決定してしまっていて、従属的な家族成員は、制裁を恐れて権力者に反抗したり、自由に意見を表明できないような抑圧的な家族システムである。

家族 SALAD モデルの 3 つ目は、自由放任的 (Laissez-faire/Anarchy) 家族で、家族内に共有されているルールが全くなく、両親が子どもをほったらかしていたり、親が親としての役割をきちんと果たしていなかったり、家族全員がバラバラで、各々が好き勝手にやっているが、相手の意に反した行動を誰かが取ったときには、突然気まぐれに理不尽に怒りをぶつけたり、度を越した制裁を加えたりするような家族システムである。

家族 SALAD モデルの 4 つ目は、民主的 (Democracy) 家族で、家族のことは何でも、家族全員で自由に発言して、家族のルールなども含めて話し合いで決めていくような、平等でリベラルな家族システムである。

家族 SALAD モデルにおいては、自生的秩序的家族が、家族の永続性、凝集性、秩序性、世代継承性などの点において最も望ましい家族スタイルではないかと仮説されている¹²⁾。

(7) YC に関する家族心理学における先行研究について

YC の実態調査や YC についての事例研究の多くは、社会学¹³⁾ や社会福祉学^{6) 8)}、看護学²⁾、公衆衛生学¹⁶⁾ の専門家によってなされてきた。YC という社会現象は家族と切っても切れないにもかかわらず、家族心理学者による研究は相対的に少ないと言わざるを得ない。

そのような中でも、東北大学の奥山は、家族心理学の視点から YC における介護負担感に影響する要因についての研究を家族の関係性という視点から

行っている¹⁰⁾ ことに加えて、ヤングケアラー心理尺度の開発¹¹⁾ なども行っている。また内山ら¹⁵⁾ は、ヤングケアラー傾向のある青年の家族構造と抑うつ傾向について、家族心理学的研究を行っている。このような例外はあるにしても、その数は依然として少ない。

そこで、本研究の意義は、①家族心理学的研究であることに加えて、②上述の家族心理学者による家族心理学研究とは異なり、家族システム理論として 50 年以上の歴史があるボスゾルメニィ = ナージの文脈療法のパラダイムに基づいて行われること、そして③小野寺によって考案された家族 SALAD モデルに基づいて、家族スタイルと YC や子どもの親化との関連性についても実証的に検討されることである。

2. 目的

本研究の目的は、①医療系大学 1 年生における YC あるいは YC 傾向における実態を調べること、②子どもの親化を測定できる子どもの親化尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討すること、そして③ 4 種類の家族スタイルと YC、子どもの親化、および他の変数との関連性について検討することである。

3. 方法

調査対象者：東京保健医療専門職大学の OT (作業療法)・PT (理学療法) 学科 1 年生 112 名 (男子 53 名、女子 58 名、その他 1 名、 $M = 18.3$ 歳、 $SD = 0.52$)。

質問紙法：フェイスシート (年齢、性別、所属学科、家族構成)、家族 SALAD モデル尺度 (4 件法：56 項目)¹²⁾、対人倫理感尺度 (垂直：親子のような縦の対人関係を示す) (5 件法：12 項目)⁵⁾、子どもの親化尺度 (5 件法：20 項目) (小野寺、2022)、家族と自己のアイデンティティ融合尺度 (5 件法：1 項目)¹⁴⁾、YC 実態調査項目 (①中高生時代の通学状況、②遅刻・早退状況、③部活動、④学校生活状況、⑤家族内ケア対象の有無、⑥主なケア対象、⑦ケアの理由、⑧ケアを始めた年齢・終えた年齢、⑨ケアの頻度、⑩ケアの平均時間、⑪ケアによる生活への悪影響、⑫ケアの身体的・精神的負担)⁹⁾、中高生時代の心身健康状態 (0 ~ 100 点の自由記述：1 項目)、中高生時代の家族満足度尺度 (0 ~ 100 点の自

表2 記述統計量

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
家族システム =SALAD モデル					
自生的秩序的家族	112	10	38	25.47	6.43
独裁的家族	112	0	38	11.74	7.80
民主的家族	112	2	39	25.76	6.71
自由放任的家族	111	0	25	10.29	6.67
対人倫理感尺度（垂直） ^{※1}					
公正の恩恵因子	111	10	30	24.47	4.49
不公正因子	111	6	26	11.05	5.20
子どもの親化 (parentification) 尺度	110	17	66	30.12	11.43
中高生時代の心身の健康状態	108	0	100	74.16	19.72
中高生時代の家族満足度	108	0	100	82.59	20.91
中高生時代の人生満足度	108	0	100	77.32	20.10
中高生時代の主観的 YC 度	107	0	100	19.49	23.55

※1 対人倫理感尺度（垂直）は2因子から成る（Hargrave, T.D. & Jennings, 1991）。両因子ともに6項目から成り、公正の恩恵因子の信頼性係数は $\alpha = .832$ 、不公正因子の信頼性係数は $\alpha = .859$ である。

由記述：1項目）、中高生時代の人生満足度尺度（0～100点の自由記述：1項目）、主観的ヤングケアラー度（0～100点の自由記述：1項目）で測定された。なお、得られたデータはPC入力され、SPSS ver.11にて統計解析された。

本研究で使用された家族 SALAD モデル尺度の4つの下位尺度（自生的秩序的家族、独裁的家族、自由放任的家族、民主的家族）の項目例については小野寺¹²⁾を参照されたい。

【倫理的配慮】

本研究は、東京保健医療専門職大学の研究倫理審査委員会の承認を得た（倫理審査番号：TPU-23-006）。

4. 結果

（1）記述統計量について

調査対象者の平均年齢（*M*）については18.3歳（*SD* = 0.52）であり、YCの定義（18歳未満）に大きく逸脱していなかった。家族構成については、「両親と自分と兄弟姉妹」が56%と最も多かった。2番目に多かったのは、「両親と自分」で14%、3番目に多かったのは「両親と自分と兄弟姉妹と祖父母（3世代家族）」で13%であった。中学時代の出欠状況については、79%が「欠席しない」か「ほとんど欠席しない」と回答していた。部活動への参加状況については、80%が「休まず参加した」と回答してい

た。中高生時代の家族内におけるケアする対象の有無については、「ケアの対象がいた」と回答したのは17名（15.3%）であった。ただ、本研究で使用した調査用紙においては、ケア対象の有無の項目の後に、ケアの具体的な対象、頻度、時間、学校生活への影響等についての詳細な項目が続いていたのであるが、それらの項目の全てに回答したのは3名（3%）のみであった。

本研究において検討する尺度・項目等の記述統計量を表2に示した。

（2）子どもの親化尺度の因子分析結果

YC研究文献および家族心理学文献、特にボスゾルメニィ＝ナージの文脈療法に関連した文献に基づいて作成された子どもの親化尺度（Parentification Scale）（20項目）について、まず子どもの親化尺度全体の内的整合性（信頼性）を検討するために、Cronbachの α 係数を算出した（ $\alpha = .910$ ）。その結果、十分な内的整合性が認められた。その際、「項目合計統計量」における「項目が削除された場合のCronbachのアルファ」に基づいて3項目削除された。

残った17項目の子どもの親化尺度を用いて因子分析（主因子法、バリマックス回転）が行われた。その結果、解釈可能性から3因子にまとまった（累積因子寄与率=56.2%）（表3）。

第1因子に負荷量の高かった項目は、「私は、家族

表3 子どもの親化尺度の因子分析結果*1 (主因子法、バリマックス回転、 $\alpha = .907$)

	1因子	2因子	3因子	
第1因子 親責任抱え込み因子 $\alpha = .917$				
Q88 私は、家族の中で、多くの責任を引き受けていた	0.951	0.169	0.147	
Q87 私は、自分自身の人生を生きていなかったように感じる	0.764	0.363	0.076	
Q90 私は、親の面倒をみている感じがした	0.763	0.265	0.155	
Q86 私は、年齢にふさわしくないほど重い責任を担っていた	0.682	0.357	0.240	
Q89 私は、家族のためにがんばっていても、認めてもらえなかった	0.671	0.397	0.050	
第2因子 親子役割逆転因子 $\alpha = .855$				
Q71 私の「両親（母親・父親）」は、「親なのに親らしくない」と感じていた	0.235	0.823	0.081	
Q80 私の「両親（母親・父親）」は、親らしくない（親とは思えない）ときが多かった	0.252	0.748	0.214	
Q84 私は、家族の中では、子どもとしてしていることができなかった	0.512	0.573	0.175	
Q82 私は、家族に対して犠牲を強いられていた	0.362	0.499	0.239	
Q72 私は、大人の役割を親から要求されていた	0.287	0.470	0.311	
Q81 「自分の方が親よりも親らしい」と感じる時が多かった	0.315	0.433	0.415	
第3因子 親役割代行因子 $\alpha = .774$				
Q79 私は、親に代わって、家事を行っていた	-0.014	0.008	0.759	
Q76 私が親の役割を果たさなければ、家が回らない（成り立たない）と感じていた	0.360	0.164	0.600	
Q75 私は、親の役割を求められていると感じていた	0.242	0.235	0.598	
Q78 私は、親の感情的なサポート（愚痴・悩みを聴く、励ますなど）をしていた	-0.074	0.131	0.582	
Q85 私は、自分が家族を支えているように感じていた	0.334	0.190	0.442	
Q77 親を喜ばせるためにしてきたことは、親孝行のレベルを超えていた	0.380	0.170	0.408	
	回転後の負荷量平方和	4.1	2.9	2.5
	累積寄与率 (%)	24.3	41.4	56.2

*1 子どもの親化尺度は20項目であるが、信頼性分析より、Q73、Q74、Q83の3項目が削除され、17項目で因子分析が行われた。

の中で、多くの責任を引き受けていた」「私は、自分自身の人生を生きていなかったように感じる」「私は、年齢にふさわしくないほど重い責任を担っていた」など5項目であった。したがって、この因子は、本来は親が引き受けるべき重い責任を引き受けていて、子どもは自分の人生を生きられていないことを表していると解釈された。そこでこの因子は「親責任抱込因子」と名づけられた($\alpha = .917$)。第2因子に負荷量の高かった項目は、「私の両親は、親なのに親らしくないと感じていた」「私は、大人の役割を親から要求されていた」「自分の方が親よりも親らしいと感じる時が多かった」など6項目であった。したがって、この因子は、親が親らしく振舞っておらず、子どもが大人の役割を求められて、子どもの方がむしろ親らしいことを表していると解釈された。そこでこの因子は「親子役割逆転因子」と名づけられた($\alpha = .855$)。第3因子に負荷量の高かった項目は、「私は、親に代わって、家事を行っていた」「私が親の役割を果たさなければ、家が回らない（成り立たない）と感じていた」「私は、親の感情的なサポート（愚

痴・悩みを聴く、励ますなど）をしていた」「親を喜ばせるためにしてきたことは、親孝行のレベルを超えていた」など6項目であった。したがって、この因子は、本来親がなすべき食事、洗濯、買い物などの家事を子どもが代行していること（道具的ケア）に加えて、子どもが親を喜ばせたり、愚痴や悩みを聞いてあげたり励ましたりといった親の感情的サポート（表出的ケア）を行っていると表していると解釈された。そこでこの因子は「親役割代行因子」と名づけられた($\alpha = .774$)。

(3) 4種類の家族スタイルと子どもの親化尺度との相関係数 (r) について

家族 SALAD モデルにおける4種類の家族スタイルと子どもの親化尺度との間の相関係数を算出した。その結果、すべての家族スタイルとの間で有意な相関が認められた(表4)。具体的には、子どもの親化尺度と正の相関が認められたのは、独裁的家族スタイル ($r = .544^{***}$) と自由放任的家族スタイル ($r = .665^{***}$)、および対人倫理感尺度の不公正因子

表4 4種類の家族スタイルと子どもの親化尺度の間のピアソン相関係数 (r) ※1

	子どもの親化尺度	平均値	標準偏差	N
自生的秩序家族	-0.206*	25.47	6.43	112
独裁的家族	0.544***	11.74	7.80	112
民主的家族	-0.484***	25.76	6.71	112
自由放任的家族	0.569***	10.29	6.67	111
対人倫理感尺度 (垂直) : 公正な恩恵因子	-0.514***	24.47	4.49	111
対人倫理感尺度 (垂直) : 不公正因子	0.665***	11.05	5.20	111
子どもの親化 (Parentification) 尺度	—	30.12	11.43	110

※1 * $p < .05$, *** $p < .001$

($r = .569^{***}$) であった。すなわち、独裁的家族スタイルと放任的家族スタイルが高まると、加えて対人倫理感における不公正が高まると子どもの親化も高まることが示唆された。それに対して、子どもの親化尺度と負の相関が認められたのは、自生的秩序の家族スタイル ($r = -.206^*$) と民主的家族スタイル ($r = -.484^{***}$)、および対人倫理感尺度の公正な恩恵因子 ($r = -.514^{***}$) であった。すなわち、自生的秩序の家族スタイルと民主的家族スタイルが高まると、加えて対人倫理感における公正の恩恵が高まると、子どもの親化が低下することが示唆された。

(4) 中高生時代における家族内におけるケアする対象の有無における t 検定について

中高生時代における家族内におけるケアする対象の「あり」群・「なし」群における主観的 YC 度と子どもの親化尺度について t 検定を行った。その結果、ケア対象の「あり」群は「なし」群と比べて、主観的 YC 度 ($t(104) = 3.725, p < .001^{***}$) と子どもの親化尺度の得点において有意に高かった (子どもの親化尺度 : $t(107) = 2.802, p = .006^{**}$)。

(5) 全体データ、男女データ別における主観的 YC 度との相関係数 (r)

中高生時代における主観的 YC 度と、心身の健康状態、家族満足度、人生満足度との間のピアソンの相関係数を算出した。その結果、全体データと男性データにおいては有意な相関は認められなかったが、女性データにおいてのみ、主観的 YC 度と心身の健康状態 ($r = -.292^*$)、および家族満足度 ($r =$

$-.302^*$) との間で有意な負の相関が認められた。したがって、中高生時代における女性においては主観的 YC 度が高まると、心身の健康状態と家族満足度が低下することが示唆された。

(6) 5種類の家族構造における一元配置分散分析結果 (全体データ)

5つの家族構造間において、自己と家族とのアイデンティティ融合度、心身の健康状態、家族満足度、対人倫理感尺度 (垂直) の公正の恩恵因子、子どもの親化尺度において分散分析を行った。その結果、5つの家族構造間において多くの有意差が認められた (表5)。

表5より、自己と家族とのアイデンティティ融合度においては、父子家庭 (B)、両親と自分と兄弟 (C)、3世代家族 (D) と母子家庭 (A) との間、および父子家庭 (B)、両親と自分と兄弟 (C)、3世代家族 (D) と両親不在家族 (E) との間において有意差が認められた ($F(4,106) = 3.866, p = .006^{**}$)。

すなわち、母子家庭 (A) と両親不在家族 (E) の家族構造の調査対象者は、両親が揃った家族の調査対象者と比べて、有意に自己と家族とのアイデンティティ融合度 (情緒的一体感) が低かった。心身の健康状態においては、父子家庭 (B) と両親と自分と兄弟 (C)、3世代家族 (D) 母子家庭 (A)、両親と自分と兄弟 (C)、3世代家族 (D) との間、および両親不在家族 (E) と両親と自分と兄弟 (C)、3世代家族 (D) との間で有意差が認められた ($F(4,103) = 5.185, p = .001^{***}$)。すなわち、父子家庭と両親不在家族の調査対象者は、両親が揃った家族と母

表5 5種類の家族構造間における一元配置分散分析結果^{※1}

家族構造	母子家庭 (A) (n = 12)		父子家庭 (B) (n = 4)		両親と自分と兄弟 (C) (n = 79)		3世代家族 (D) (n = 15)		両親不在家族 (E) (n = 2)		平方和	F 値 (df)	有意確率	多重比較
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)				
	家族とのアイデンティティ融合度	3.08	0.90	4.50	0.58	4.08	1.08	4.07	0.80	2.50				
中高時代の心身の健康状態	71.55	18.62	42.50	34.03	76.70	18.21	76.14	13.81	40.00	0.00	6970.753 34621.571	5.185 (4, 103)	0.001***	B<A, B<C, B<D E<A, E<C, E<D
中高時代の家族の居心地の良さ (家族満足度)	72.91	23.49	56.25	39.02	85.18	18.40	90.29	9.82	35.00	7.07	9682.103 37117.971	6.717 (4, 103)	0.000***	A<C, A<D, A>E, B<C, B<D, E<A, E<C, E<D
対人倫理感尺度 (垂直) : 公正な恩恵因子	19.82	5.33	24.75	4.57	25.18	4.12	24.60	3.94	20.50	4.95	309.634 1912.005	4.291 (4, 102)	0.003**	A<B, A<C, A<D
子どもの親化尺度	32.27	13.30	34.50	16.42	29.08	10.17	28.73	10.50	60.50	7.78	2087.310 12142.154	4.513 (4, 105)	0.002**	E>A, E>B, E>C, E>D

※1 ** $p < .01$, *** $p < .001$

子家庭の調査対象者と比べて、有意に心身の健康状態が悪かった。家族満足度 (居心地の良さ) においては、両親不在家族 (E) と母子家庭 (B)、両親と自分と兄弟 (C)、3世代家族 (D) との間、父子家庭 (B) と両親と自分と兄弟 (C)、3世代家族 (D) との間、および母子家庭 (A) と3世代家族 (D) との間、父子家庭 (B) と両親と自分と兄弟 (C)、3世代家族 (D) との間において有意差が認められた ($F(4,103)=6.717, p<.001$ ***)。すなわち、両親不在家族が最も家族満足度が低く、2番目が父子家庭、3番目が母子家庭というように、片親家族は両親が揃った家族と比べて家族満足度が低かった。対人倫理感尺度 (垂直) の公正の恩恵因子においては、母子家庭 (A) と父子家庭 (B)、両親と自分と兄弟 (C)、3世代家族 (D) との間で有意差が認められた ($F(4,102)=4.291, p=.003$ **)。すなわち、母子家庭の調査対象者は、父子家庭、両親と自分と兄弟、3世代家族の調査対象者と比べて有意に対人倫理感の公正の恩恵が低かった。換言するならば、母子家庭の調査対象者は、より多くの不公正さを体験していた。最後に子どもの親化尺度においては、両親不在家族 (E) とそれ以外の全ての家族構造との間で有意差が認められた ($F(4,105)=4.513, p=.002$ **)。すなわち、両親不在家族の調査対象者は、その他全ての家族構造の調査対象者と比べて有意に子どもの親化尺度の得点が高かった。

(7) 4種類の家族スタイルから子どもの親化尺度へのステップワイズ重回帰分析結果

家族 SALAD モデルにおける4種類の家族スタイルを説明変数として投入し、子どもの親化尺度を従属変数としたステップワイズ重回帰分析を行った。その結果、子どもの親化尺度に有意なプラスの影響を与えていたのは、自由放任的家族スタイル ($\beta=.391$ ***) と独裁的家族スタイル ($\beta=.341$ ***) であった ($R^2=.393$ ***) (図2)。

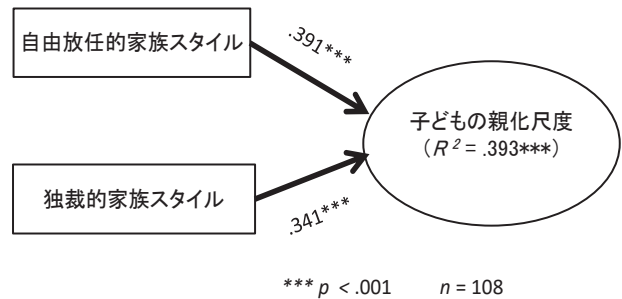


図2 4つの家族スタイルから子どもの親化尺度へのステップワイズ重回帰分析結果

さらに、子どもの親化尺度の3つの下位因子と4つの家族スタイルを説明変数として投入し、①家族満足度 (居心地の良さ)、および②主観的YC度を従属変数としたステップワイズ重回帰分析を行った。その結果、①家族満足度に有意なマイナスの影響を与えていたのは、子どもの親化尺度の第2因子の親子役割逆転因子 ($\beta=-.556$ ***) であり、プラスの影響を与えていたのは民主的家族スタイル ($\beta=.199$ *) であった ($R^2=.393$ ***) (図3)。

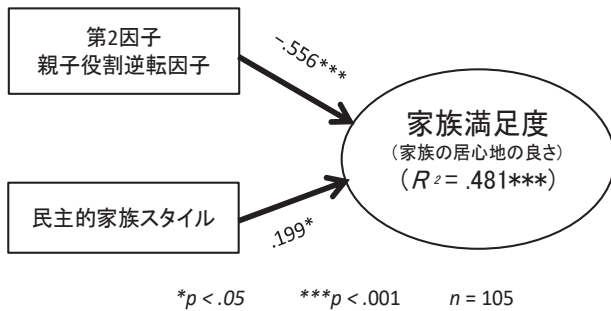


図3 4つの家族スタイルと子どもの親化尺度下位因子から家族満足度へのステップワイズ重回帰分析結果

②主観的YC度へ有意なプラスの影響を与えていたのは子どもの親化尺度の第3因子の親役割代行因子 ($\beta = .310^{**}$) と第1因子の親責任抱込因子 ($\beta = .209^*$) であった ($R^2 = .178^{***}$) (図4)

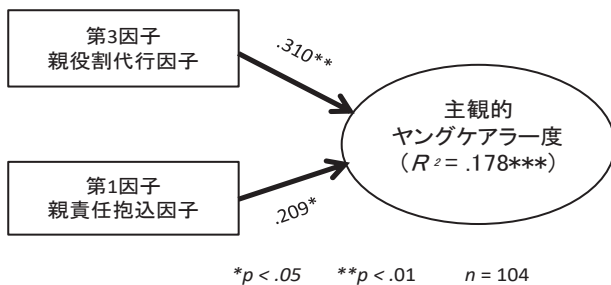


図4 4つの家族スタイルと子どもの親化尺度下位因子から主観的ヤングケアラー度へのステップワイズ重回帰分析結果

5. 考察

本研究は、①医療系大学1年生におけるYCあるいはYC傾向における実態を調べることに、②子どもの親化を測定できる心理尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討すること、および③家族SALADモデルにおける4種類の家族スタイルとYC、子どもの親化、およびその他の変数との関連性について検討することであった。

ここでは、本研究の結果を振り返りながら考察していく。

まず、「記述統計量について」であるが、本研究の調査対象者の平均年齢が18.3歳であったことから、日本ケアラー連盟によるYCの定義にほぼ合致していたことが確認された。したがって、本研究の結果は、ぎりぎりではあるが、現役のYCに準ずるエビデンスとして解釈してもさほど問題は無いのではないかとと思われる。また、家族内におけるケア対象の

有無項目においては、15.3%が「ケア対象がいる」と回答していたが、後続するYCについてのより詳細な質問項目にまで回答したのは3名(3%)であったことから、先行研究¹⁾⁶⁾で見出された数値(例えば、全日制高校2年生のYC割合は4.1%⁹⁾、青森県で3万2540人を対象に実施された調査ではYC割合は大学生2.5%¹⁾)に照らした場合、3%という数値の方が、大学生におけるYC割合の実態を反映していると考えられる。

次に、YCの実態調査や先行研究、および家族心理学分野で長年蓄積されてきた臨床知見等を加味して、YCを意味するか、密接に関連する構成概念である子どもの親化(parentification)尺度を開発し、信頼性係数(α)と因子分析にて検討した結果、3因子が得られた。まず信頼性については、十分な内的一貫性が確認された。各因子については、第1因子は「親責任抱込因子」、第2因子「親子役割逆転因子」、そして第3因子は「親役割代行因子」と命名された。家族心理学文献の中では、親化の特徴として、親子の役割逆転(role reversal)が指摘されてきた。これは本来は親が担う役割を子どもが担っている状況であり、YCの特徴とも一致する⁶⁾¹³⁾。したがって、子どもの親化尺度の第1因子の「親責任抱込因子」と第2因子「親子役割逆転因子」において、本来は親が背負う責任を子どもが背負い、親子の役割が逆転している状態⁴⁾⁷⁾というYCの核心的特徴を捉えることができる可能性が高いと考える。加えて、第3因子の「親役割代行因子」では、こちらも古くから親化に関する家族心理学文献⁴⁾⁷⁾の中で指摘されてきたもので、親化された子どもが遂行しているとされる2つのケア、すなわち、日々の家事や雑事を親の代わりに子どもが代行する「道具的ケア」と、親の愚痴や悩みをあたかもカウンセラーのように傾聴してあげ、励ましたり、勇気づけたり、鼓舞したりといった「感情的ケア(表出的ケア)」をしっかりと測定できるようになっている。この点において、本尺度における内容的妥当性に関してはある程度担保されたのではないかと考えられる。このように家族心理学の過去の先行研究をしっかりと押さえた上で、日本語として開発された子どもの親化を測定できる心理測定尺度としては、最初のものであると考えられる。社会受けしやすい「ヤングケア

ラー」という流行言葉ではなく、50年以上の研究知見を有する「親化」という概念で実証的研究が多数行われることを期待したい。

次に、4種類の家族スタイルと子どもの親化尺度との相関を検討した結果、自生的秩序的家族スタイルと民主的家族スタイルとは負の相関が認められ、独裁的家族スタイルと自由放任的家族スタイルとは正の相関が認められた。小野寺の先行研究¹²⁾から自生的秩序的家族スタイルと民主的家族スタイルはプラスに相関し、これらの両家族スタイルの特徴の増加は家族満足度の高さに関連することが示されている。逆に、独裁的家族スタイルと自由放任的家族スタイルはプラスに相関し、これらの両家族スタイルの特徴が増えると、家族満足度が低下することが示されている。したがって、子どもの親化尺度と正の相関が認められたのが、独裁的家族スタイルと自由放任的家族スタイルであったことから、民主的ではなく、ルールや決まり事がなく、何が起こるか分からないような無秩序な家族において、子どもの親化という現象が生じやすいことが示唆された。換言すれば、家族スタイルが、自生的秩序的家族や民主的家族スタイルに変わることで、子どもの親化を減らすことができるかもしれない。

さらに、全体データ、男女データ別における主観的YC度と中高生時代の心身の健康状態や家族満足度等との間の相関を検討したところ、女性データのみにおいて、主観的YC度との間で有意な負の相関が認められた。すなわち、女性データにおいて主観的YC度が高まるほど、心身の健康状態が悪化し、家族満足度が低下することが示された。ここで大事なことは、女性データのみにおいてこのような結果が認められたということである。つまり、女性の方が男性よりも、YC役割を担うことが多く、しかもその悪影響が女性において、より顕在化しやすいことが推測された。

次に、5種類の家族構造において一元配置分散分析で検討した結果、家族構造間での有意差が多数認められた。全ての結果について詳細に振り返ることはできないが、全体の傾向として、片親家族（母子家庭・父子家庭）や両親不在の家族構造の調査対象者は、両親が揃った家族構造の調査対象者と比べて、家族とのアイデンティティ融合（情緒的一体感）

や心身の健康状態、家族満足度、および親化の度合いにおいて、有意により適応度が低い（望ましくない）傾向が認められたとすることができる。

さらに、4種類の家族スタイル（説明変数）から子どもの親化尺度（従属変数）へのステップワイズ重回帰分析が行われた結果、子どもの親化尺度に有意な正の影響を与えていたのは、影響が強かった順に、自由放任的家族スタイルと独裁的家族スタイルの2つであった。この結果と先ほどの4つの家族スタイルと子どもの親化尺度との相関分析の結果を合わせると、やはりこの2種類の家族スタイルは子どもの親化に対して促進的な影響を及ぼしている可能性が高いと考えられる。すなわち、法の支配（rule of law）が確立しておらず、恣意性（arbitrariness）がまん延し、ルールが不明確で、無秩序な家族スタイルにおいて、子どもの親化が促進されることが示唆された。

さらに、子どもの親化尺度の下位因子と4つの家族スタイルを投入し、家族満足度（居心地の良さ）と主観的YC度をそれぞれ従属変数にステップワイズ重回帰分析を行ったところ、家族満足度に負の影響を与えていたのは子どもの親化尺度の第2因子である親役割逆転因子であった。これは、親が親らしくなかったり、親らしく振る舞っておらず、結果として子どもの側が大人として振る舞うことを求められるような家族において、家族満足度が低下することが示唆された。しかし逆に、主観的YC度に影響を与えていたのは、子どもの親化尺度の第2因子以外の第3因子の親役割代行因子と第1因子の親責任抱込因子であったことは興味深い。主観的には、親の代わりに家事をしたりといった親の役割を代行したり、家族の責任を背負うことによって、自己をYCとしてより知覚しやすいと考えられる。それは、メディアでのYC報道においては、上記のような特徴をもってYCとステレオタイプの的に報道しているからであると考えられる。

結論としては、YCの悪影響を軽減させるためには、自生的秩序的家族や民主的家族スタイルを積極的に促進し、家族内の対人倫理感（公正性）を高めることと、片親（単親）家庭の資源（リソース）不足という負の影響をできるだけ軽減させるべく、多様な資源のうちの1つとしての医療・介護・福祉に

携わる専門職による支援というものの活用が、社会的にますます重要な意味を持つてくるのではないかとと思われる。

最後に、本研究の限界と今後の課題について言及したい。

本研究は、YC をテーマとした医療系大学の大学1年生を対象に行われた小規模な調査であった。したがって、本研究から見出された知見や結論を、安易に一般化することには慎重でなければならない。加えて、本研究は質問紙調査であり、実際のYCにインタビューしたわけでもない。したがって、本研究の分析結果から見出された内容が、現実のYC体験者の実体験とどのような関係があるのか、今後の研究として調べていかなければならない。また、質問紙で扱うことができた項目数も少なかったことに加えて、統計分析における限界もあったと思われる。したがって、これらの限界を一つずつ乗り越えていけるよう今後の研究を計画し、実施していきたいと考える。その一環としてまず取り組まねばならないことは、本研究にて開発し信頼性と内容的妥当性まで確認した「子どもの親化尺度」を、規準測度となる既存のヤングケアラー測定尺度との間での相関を確かめ、規準関連妥当性（並存妥当性）を確立することであろう。加えて、調査対象についても、今後は医療系私立大学生だけではなく、公立中高生を対象としたインタビュー調査を行っていくことも必要であろう。その際は、被験者の年齢に十分配慮した「聞き方」が重要になることに加えて、育ちの過程において「親化」が避けられなかった子どもにおいて、どのような発達の課題が生じているのかについても心理学的に捉えていくことが求められるだろう。

利益相反 (COI): 本研究においては報告すべき COI はない。

参考文献

1) 青森県健康福祉部こどもみらい課 (2023) 青森県ヤングケアラー実態調査報告書

- 2) 青山京子 (2021) 日本におけるヤングケアラー研究動向. 修文大学紀要, No. 13, pp.19-25.
- 3) Boszormenyi-Nagy, I. & Krasner, B. (1986) Between Give and Take: A Clinical Guide To Contextual Therapy. Routledge
- 4) Chase, N. D. (ed.) (1999) Burdened children: Theory, research and treatment of parentification. SAGE publications
- 5) Hagrave, T.D., Jennings, G. & Anderson, W.T. (1991) The development of a relational ethics scale. Journal of Marital and Family Therapy, 17, 145-159.
- 6) 濱島淑恵 (2021) 子ども介護者：ヤングケアラーの現実と社会の壁. 角川新書
- 7) Jurkovic, G. J. (1997) Lost Childhood: The Plight of the Parentified Child. Routledge
- 8) 河本秀樹 (2020) 日本のヤングケアラー研究の動向と到達点. 敬心・研究ジャーナル, 第4巻第1号, p. 45-53.
- 9) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング (2021) 令和2年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業 ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書. https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2021/04/koukai_210412_7.pdf (2023年3月9日閲覧)
- 10) 奥山滋樹 (2020) ヤングケアラーにおける介護負担感に対する影響要因の検討：家族の関係性、介護、ケアによる心理的体験の側面から. 家族心理学研究, 第33巻(2), 73-85.
- 11) 奥山滋樹 (2018) ヤングケアラー心理尺度改訂版の開発：項目表現の変更とカットオフポイントの検討. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第67巻(1), 257-266.
- 12) 小野寺哲夫 (2019) 家族システム=SALADモデルに関する家族心理学的研究. 敬心・研究ジャーナル, 第3巻第2号, 39-49.
- 13) 澁谷智子 (2018) ヤングケアラー：介護を担う子ども・若者の現実. 中公新書.
- 14) Swann W. B.Jr., Gómez A., Seyle C. D., Morales J. F., Huici C. Identity fusion (2009) The interplay of personal and social identities in extreme group behavior. Journal of Personality and Social Psychology, 96, 995-1011.
- 15) 内山彩香, 椎野睦, 若島孔文 (2022) ヤングケアラー傾向のある青年の家族構造と抑うつ症状の検討. (東北大学大学院) 心理支援センター研究紀要, 第1巻, 239-251.
- 16) 渡邊多永子, 田宮菜奈子, 高橋秀人 (2019) 全国データによるわが国のヤングケアラーの実態把握 — 国民生活基礎調査を用いて、厚生の指標66 (13), 31-35.

受付日：2024年2月20日

受理日：2024年4月30日

